

## 平成 28 年度

# 「甲斐のくろまる」の栽培管理の手引き

果樹食品流通課、果樹試験場

「甲斐のくろまる」(ピオーネ×山梨 46 号(巨峰×巨峰))は、早生で着色が良く、食味が優れる黒色系 4 倍体品種であり、盆前出荷が可能な地域や巨峰群品種の着色不良が問題となっている地域を中心に導入が期待されている。栽培管理については、これまで果樹試験場の栽培・研究等から明らかになった特性に応じ、次の点に留意する。

### 留意すべき特性

若木のうちは、粗着果房になりやすい。  
これは、年により開花前に落蕾が発生すること、巨峰より花穂が小さく花蕾数が少ないことなどによると考えられる。樹齢が若いと特にこの傾向が強くなることから、以下のポイントに留意して着粒の確保を最重点に管理を行う。



写真1 甲斐のくろまるの花穂

巨峰の花穂

## 高品質安定生産のための重要ポイント 1

樹勢に応じた剪定・新梢の発芽率の向上により、樹勢の適正化を図る  
発芽率の向上と落蕾の軽減のため、定期的なかん水に努める

### 整枝・剪定

基本的な整枝や切り返し程度は、種なし巨峰・ピオーネに準じる。ただし、幼木のうちは樹勢が強いが、結実が始まると巨峰、ピオーネよりも樹勢が落ちついてくる傾向が見られるので、樹勢に応じ切り詰め程度を調整する。やや強めの樹勢に導くことで玉張りが向上し、良果房が生産できる。なお、巨峰、ピオーネに比べ樹冠拡大には時間がかかる傾向がみられる。

### 発芽率の向上

若木のうちは樹勢が強く、結果母枝が太くなるので、発芽率向上のため芽キズ処理を行う。特に、徒長的に伸長した結果母枝には、シアナミド剤の散布または塗布、またはメリット青原液の塗布を行う。シアナミド剤：ヒット 10またはCX-10、10～15倍、散布の場合は150～200リットル/10a

### かん水

発芽率の向上と落蕾の軽減のため、春先から定期的なかん水を行う。生育期全般を通して、土壌が極端に乾燥しないように定期的なかん水に努める。

### 芽かき・新梢誘引

芽かきは次のとおり3回程度に分けて実施する。

1回目は、展葉2～3枚時に不定芽、副芽、基芽を中心に除去する。

2回目は、展葉5～6枚時に新梢の勢力を揃えるように、芽かきを行う。

3回目は、展葉7～8枚時に誘引と合わせて、混み合っている部分の新梢、結果枝基部で徒長的

に生育している新梢等を除去する。

#### ストレプトマイシン剤の処理

無核果率を向上させるため、満開2週間前から開花始め期にアグレプト液剤1,000倍を散布または浸漬する。

#### 開花前の花穂の整理

開花期に30cm未満の弱い新梢はカラ枝とする。樹勢と新梢の伸長程度に応じ整理する。

### 高品質安定生産のための重要ポイント2

房づくり時の花穂長は4cmを超えないようにする

結実確保と果粒肥大促進のため、開花直前～開花始めに新梢先端の未展葉部を摘心する

#### 房づくり

花蕾数が巨峰より少ないため、整形した花穂が短すぎると着粒数が不足し、長すぎると花穂先端が花ぶるいを起こしやすい傾向があるので、房づくり時（開花始め）の花穂長は3～4cmとする。

房尻を摘むと支梗が横に伸びて、密着した円筒形の果房になりにくいいため、摘まない方が良い。生育旺盛な新梢は、花ぶるい防止のため、開花直前～開花始めに新梢先端の未展葉部を摘心する。なお、延長枝は樹冠拡大のため摘心は避ける。

### 高品質安定生産のための重要ポイント3

着粒安定のため、開花始めにフルメット5ppmを花穂(花房)に浸漬する

1回目ジベレリン処理の時期が遅れないように注意する

#### 着粒安定のためのフルメット処理

着粒安定のため、開花始めに（一、二輪咲き始めたらずくに）フルメット5ppmを花穂(花房)に浸漬する。これは、ほ場内で開花が確認され次第すぐ実施する。園全体の房づくりを仕上げからでは処理時期が遅れてしまうので、花穂整形前に房先4cmを花穂(果房)浸漬し、その後に房づくりを行う。

#### 第1回目ジベレリン処理

第1回目ジベレリン処理は、満開～満開3日後の花穂を順次処理する（ひろい漬け）。花冠をかぶったまま内部で開花している場合が多いので(写真2)、1回目のジベレリン処理が遅れないように注意する(写真2の花穂は満開時の状態)。

なお、開花始めに着粒安定のためのフルメット5ppmの処理を行っているため、ジベレリン処理は2.5ppmの単用処理とする。



写真2 満開時の花穂  
(花冠が着いたまま開花)

## 高品質安定生産のための重要ポイント4

花カスが残りやすくサビ果が発生しやすいので、1回目ジベレリン処理後に花カス落としを徹底する

### 花カス落とし

花冠や雄ずいなどの花カスが果粒に残る場合は、サビ果や傷果の原因になるので、1回目ジベレリン処理後に花カス落としを行う。なお、この時期の小果梗は折れやすいので注意する。

### 第2回目ジベレリン処理

第2回目ジベレリン処理は、満開10～15日後に実施する。ジベレリン処理は25ppmの単用処理とする。

表1 植調剤の処理時期と濃度

植調剤名	使用目的	使用濃度	使用時期
アグレプト液剤	無種子化	1000倍	満開2週間前～開花始め期
フルメット液剤	着粒安定	5ppm	開花始め(園内で開花が始まったら)
ジベレリン剤(1回目)	無種子化	25ppm	満開～満開3日後
ジベレリン剤(2回目)	果粒肥大促進	25ppm	満開10～15日後

### 摘房

第1回目ジベレリン処理から摘粒までに、着粒状況や新梢の勢力を確認しながら、早生の特性を最大限に活かすために、1新梢1果房を基本に整理する。

### 摘粒

着粒数が少ないので残す果粒の見極めをしっかりと行い、正常な果粒を残すように心掛ける。

早生の特性を活かすため、目標果房重350～

400gの場合、摘粒時の軸長は5～6cm、粒数を25～30粒程度とする。

平成27年度の検討で目標果房重500gでの栽培は可能であることが確認された。この場合、房づくり時の花穂長は4cm、摘粒時の軸長は7cm、粒数を35粒程度とする。

基本的には房尻をつかい上部支梗を切り下げて軸長5～7cmに調整するが、房尻が花ぶるいした場合には、房尻を切り上げて軸長5～7cmに調整する。

着粒数が少ない場合は、下向きや上向きの果粒も残し、目標果房重を確保する。

4粒×2段

3粒×3段

2粒×5段

1粒×3段

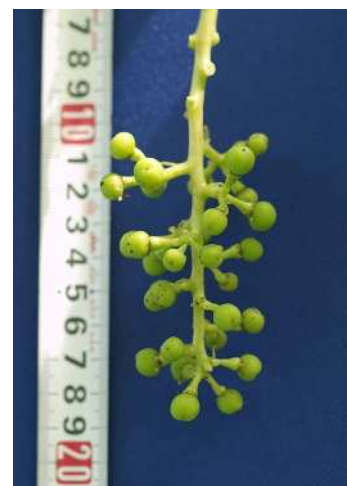


写真3 摘粒後（粒数30粒）の果房

### 収量調節の目安

基本的には、種なし巨峰に準じる。目標収量を10aあたり収量1,200kgとした場合、果房重が350gで3400房/10a、400gで3000房/10a、500gで2400房/10aとなる。

## 高品質安定生産のための重要ポイント5

棚面が明るい場合は、クラフト傘等を用いて日焼け防止に努める

### 袋かけ、傘かけ

袋は白色袋を用いて、直射日光が当たる部分は日焼け防止のため、袋の上からクラフト傘等をかける。傘のまま管理する場合は、乳白の傘を用いるが、袋の管理と同様に、直射日光が当たる部分は乳白の傘の上にクラフト傘等をかける。

### 摘粒終了以降の新梢管理

新梢が混み合い棚面に暗い部分があれば、誘引の見直しを行う。副梢の発生は少ないため基本的には剪除する必要はないが、棚面が暗くなっている場合は4～5枚程度残して剪除する。ベレーゾン(果粒軟化期)を迎えても伸長が止まらない新梢は摘心を実施し、枝の充実を図る。

## 高品質安定生産のための重要ポイント6

着色先行であるため、食味を確認してから収穫を開始する

### 収穫の目安

収穫始めの目安は、種なし紫玉、種なし巨峰の山梨県青果物標準出荷規格に準じる。

着色(品種固有の色沢を有し、果梗周辺まで完全に紫黒色に着色)、糖度17.0度以上、pH3.2以上

果樹試験場(標高:470m)での収穫始め(糖度17度に

到達した日)は H26年:7月31日

H27年:7月30日



写真4 目標とする密着果房

### 病虫害防除

基本的には種なし巨峰・ピオーネの防除に準じる。

### 肥培管理

基肥については、種なし巨峰・ピオーネに準じる。若木で樹勢が非常に強い場合は施肥を控える。

### 短梢栽培・ハウス栽培の適応性

短梢栽培については、事例が少なく花穂の着生などが確認できていないため、当面導入は控える。ハウス栽培の早い作型の適応性は確認中であるので、導入は控える。

本資料は、これまでの果樹試験場での試験栽培・研究に基づいて作成したものであり、今後も安定生産に向けた試験を継続し、改訂を行っていく予定です。なお、本資料は各指導機関の指導を受けたうえでご活用下さい。

問い合わせ先：果樹試験場果樹技術普及部(0553-22-1921) J A 営農指導課

(平成27年12月作成)